



石明

心學道の話

三篇上

9
3895
7



門 9
流 3895
卷 7



心蒙道 此話二編卷之上

藝陽 奥回壽太講話
東武 平野播翁閑書

前席

顏淵問仁子曰克己復禮為仁一日克己
復禮天下歸仁焉為仁由己而由人乎哉
夫の語の誰歟も清くんとれ論語顏淵の篇よあておごり
きて孔顏傳授此章と中は玉格あうぐら清くとは
かゝるまを各自の法を和しの教まのうかひ先この教淵
と中清方の孔子撰此一乃清也孔子此徒三千と中て

心蒙道括

卷上

二編

一

早稲田 大學 圖書館
昭和 27.6.16 受
藏 書

元氣此可也此心と世界一面は貴いことのもゆれば
 只此世界と可也が外はなんぞも天の生くことによて
 天と物と生おはるなりとやまが陰のう陽と生出し陽
 う陰と生おし昼のう夜と生おし秋のう冬と生おし春と生おし夏と生おし
 生くするを何なり天道人ありさびのうて天と物と
 すんちみぢんもなるかうのうても口のぬんをそれでも
 本が出来るまでも春のう夏へのうも枝葉と生くまら
 けきど枝のうも葉のうも枝と葉と生くまら
 と。ソレ一やらずのうとよふ考へておらうとやまは

うう後枝葉は葉は枝とておらうへ何ゆなれば枝のうも
 陽氣が地をへまらうと春と夏と秋と冬と生おし
 芽合ひへまらうと枝の葉ももも法陰陽をさるなり
 ど身と骨と皮と肉と生長する理がまらうて親父が漸く小老
 と同じゆでやむらう生くするのうと相くハを夫の生く
 の理とをいへるなりとて生くをわゆるなり
 生くするなりとすこと死するなりと生くをわゆるなり
 は死んぬれば生くなりと死するなりと生くをわゆるなり
 死するなりと生くなりと死するなりと生くをわゆるなり
 十余はなれまらう子中も孫も死れぬなりとやまは

ついても私んれ者猶もが。それでもを解も悪りも厭ふるも
 まあしくよんごりあると本んが。やくを厭ふを
 ちんて記録べ。ゆきでも起るまはせぬといふも私んれ者猶も
 が。それでも夕へも秋がまごころ。もらひといふよりふと秋
 れ中で解るる本んと私んが世村する。それ後ろうとせ
 心ぐ二ツありませるが。れ又親類一病人でもあつて。そま
 見をなをも世のいなもね時も。これ世のいなもねま
 そりやまの世のいなもね時が。あつてそま
 本んとやううツイあてゆけまよ。そまの私んめが面出
 して。ちんごりいさむ。まあ時ひまもするがよと

世もやめすると本んが。これ世もやめする
 と催促するまもつと。ゆきうか天れ法光明と私んれ者
 手で。解してあて解るる。つちまても氣まりる。れやそれ
 屋で。私んれとまもつと。天狗どの。中も。やあふち。殺
 てはま。やうま。あて。せ。は。ま。さん。方。れ。常。り。ぐ。ん。と。た。り。ま
 ぼる。い。た。り。ま。あ。れ。胸。の。中。は。解。る。る。時。ま。あ。て。あ。て。これ
 解して。あれ。理。屈。その。理。屈。と。私。理。理。く。思。へ。もの。を。本
 の。ん。ど。や。と。思。て。は。ぼ。る。る。ま。あ。ま。い。本。ま。の。ん。ど。い。ふ。もの
 であら。あま。が。脚。已。とい。ふ。人。心。で。早。者。此。骸。り。る。後。ま。あ
 の。氣。と。い。ふ。もの。や。ち。中。う。と。た。ま。い。熱。い。氣。が。あ。り。水。ま。い。冷。ん

心學遺言 卷五 三編 二九

有りあり其州より其州乃幸。肉桂より肉桂のありきやう
 なるのでんも其人のうらたよハ強く果るおれきといふのが
 ありて人を類乃かゝられ違ふとやうは皆ちがひ人心目ド
 うらたよといふを聞かれ如くもあつてぞ。あの幸は長人もあり
 あれぬの類い人もありたのる乃強人もあり。あれぬの強
 人もあつて賢い人もあり純人もあつてお人あつてもおれき
 やういふなるものよやじよ或は強人もは業多があつて家
 業れあがりには小腰を付けて強味とてあつてあつて一人の出来
 が托鉢よ来て戸は小立てをたつてとつてそれいふおれ男が
 中へ通つていふとつていふおれきいふをたつてあつてあつてあつて

たりきくもかゝつていふをたつてあつてあつてあつてあつて
 やういふものよやじよ或は強人もは業多があつて家
 業れあがりには小腰を付けて強味とてあつてあつて一人の出来
 が托鉢よ来て戸は小立てをたつてとつてそれいふおれ男が
 中へ通つていふとつていふおれきいふをたつてあつてあつてあつて

心學通言

三續

七

ぶきのせうし年とよひのゆゑぞうう挨拶でもあり
 ころふそのトヤかふもいへば清さんお主人の天窓と今日
 うう彌羅まゝいままいかにあやうきと返答した
 んで天窓が元くるものとお長さんお主人乃起へて白う
 殿とよせやん。まひすゆゑらうのゆゑと下されといふや
 2。なりそふそのトヤがねまごとのでなふ境接まハ天窓と
 元は挨拶なり歯と引接も挨拶おし腰りまふも
 挨拶おし。たつと此間まで振袖着てお茶はくも嬉さん
 う。つ乃るおやう腰ハ二系ふなひは後一と一は入ると
 眼も鼻も一時うごき出しく顔ぢうが強動するやうよ

から本端のねりよ

梅干し中うお婆さぬも花さぬむういさもあもさけい
 けまよたつと今けあといひのなぬやうふなりまふらま
 ちうと不審らうてはうういさよふ。そうやゆふ雲ら
 のかれが全神すあ此體ハねまらかたでおしらとのまら
 ひまかふ。それよすあねまふ納得もさせずおやうよ天
 窓と元しうう歯と引接らう眼をかすあうねと志んら
 2はらうあうあふとふ切らうよはあるぬめハ全神すあ
 何をいぞ何でも。その奴まらひのあし七日の遠眼とをら
 して呉やと唇紅夜合と志んて輝てあるといふおどいで

かまひば戸障子と瓦落くもせたり。爲盡くうらしくさ
 すいそりや又まのりゆゆも射を射ぬはとあつとあ
 へて居んで居るのが已ぶ克のよや中やううゆでもその時
 その両手まきまきよ念ひをなぬるゆいよ礼よ後と
 と後まうもこのつと聖人の法解を法源切かとのよ
 なる死又女申りておどあ別してあは情乃なるゆゆ
 交とよう念念せよやなぬゆゆぞ月おいそぐ用ひても
 があひて世話しつあつ不周人でもあつとあつあつあ
 足つことふよ思ふともその教とはつたかぬ。その時の中
 たりかの法者例の法答にでたゆく是のうらみつあり

まくまほくあまこ入つし中りませと陸まうら中りませ
 ちやなぬ。さうするとあちうらうも災難はつておほく
 あちり法をさしてまうらう。わを法見まひ中りませ
 おろくことつと。あちうらうも。それいおろく法源切に能
 法つづひつたりまうらう。あちうらうらふたさおほく
 さうとつてまほおろく。あちうらうまほ法業と汲やま
 おろく。あちうらう法業を法源切にひらおろく。その私
 ち下つりませぬおろく。それを法源切に法源切に法源切
 のやちと。なませつとあちうらう法源切に法源切に法源切
 乃中ふもまほおろく。あちうらう法源切に法源切に法源切

とう人何事もいと奮めりる事もおぼへらしむるもあらず
 をのよけいごと。それかなふと純孝おものよなる人其ま
 時にぐひとおほくもなく更害もくめず親とよりく見
 合をそ密にあらう。おのれまきしたるつと。あらううふそ
 何事よ入つてあつて。や何れでもほごぬがえすまひよ来
 す。さうさうさう今日いふちうがえあつて世にたを
 おども春でぬくやれ。いや私をたをといへば。さうそん
 なら春もあつて時をぬります。おのれ清ゆりおされで
 ぐも親といふものにならぬ。丸い石で石垣つくやうよ世
 界が隅よなる門と大猫の悪念のやうよなる。そを隅く

小なふやうお荒れくや。おのれとの親ともいふ繁た合す
 のよや。それが則天理の善文といふもので。自然の修すや
 べ。天地万物一体の仁といふものよなるまに徳よ。世界中
 の人が誰でも回復せぬものにならぬ。それを愛す。一日己よ
 克てこれ修まれば天下仁よゆす。とおせしむ。さういふ
 かやうよ清話よいふもの。あまり廣大お場合ゆあ
 中々論じもの及び所でもほごうまをひご石田先生れ
 清話よよんく其その原理解らお。むろもはとやや
 お。そののでさうまひらま。此れか。の徳よ。世よ廣大お
 あづる。そのまひらま。せね。後よ。や。誰れも。此ん。ま。よ

